



日本レイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.96

日本レイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション＝WJF）2017年10月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

ジャズレコード100年記念、WJF 新シリーズ第2、3回例会(通算第63回)

サッチモの「この素晴らしき世界」から50年

&生演奏でたどるサッチモの軌跡と、ジャズレコード100年への貢献

「サッチモの『この素晴らしき世界』録音から50年」——WJFの新ジャズ歴史シリーズ例会第2回(通算62回)が8月5日(土)、東京・御茶ノ水のアテネ・フランセ文化センターで開催された。1967年8月16日の同録音から50年を記念して、この日はセイントの演奏こそなかったものの外山夫妻秘蔵のサッチモの超レア映像が次々と映し出され、サッチモの誕生日(1901.8.4)を祝うにふさわしい魅力いっぱいの催しとなった。次いで第3回(通算63回)例会「サッチモのジャズ事始め」が9月30日(土)、同じくアテネ・フランセ文化センターで開催され、演奏のなかった前回の例会をカバーするのに十分なサッチモの初録音からエラ&ルイ、ルイ&デューク・エリントン、プレイズディズニー、ハロー・ドーリー！ この素晴らしき世界まで生演奏でたどるサッチモの軌跡と、ジャズレコード100年への貢献をNY 在住、2016年日本ジャズボーカル賞大賞受賞の霧生ナブ子さん、モダンジャズの名ピアニスト、太田寛二さんをゲストに迎えてたっぷりと聞かせてくれた。



写真上は、9月30日の特別シリーズ例会第3回で霧生ナブ子さん(手前左)を迎えてのサッチモのジャズ事始め(相馬威宣さん撮影)。
写真左は、1970年8月25日のデイビッド・フロスト・ショーのテレビ番組で「この素晴らしき世界」を歌うサッチモ。

特別例会シリーズ第2回は「What a Wonderful World」特集

次々と映し出されるサッチモの超レア映像

「最初に聞いたとき、なんだかキラキラ星のような曲」と恵子さん

8月5日午後1時開場、1時半開演。あの顔、この顔…会場には次々とおなじみのWJF会員の皆さん、サッチモファン、支援者の方々が集まってこられ会場を埋めた。

この日、ニューオリンズでは「サッチモ・サマーフェスト」を開催中、2003年以来、連続出演していた外山夫妻だったが、「今年には行けなかったのですが、来年は…」と。そんな中での「What a Wonderful World」特集。

「この曲を最初に聞いたとき、なんだかキラキラ星に似たような曲だなあなんて思っていました」と恵子さん。はじめはイギリスでヒットして、アメリカに帰ってきたそうだ。

(1)この素晴らしい世界

超レア映像集最初の映像は、1970年8月25日のデイビッド・フロスト・ショーのテレビ番組。サッチモがなくなる約1年前、英国出身のこのキャスターの超人気トークショーに出演した際の一コマ。徹子の部屋に出演したゲストが「ちょっとあの歌うたって

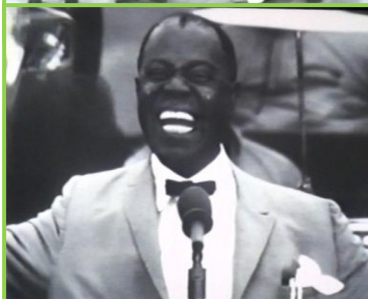
…」と乞われて歌いだしたようなシーン。サッチモの気楽で自

然な姿と音楽の魅力が場面に広がる。まさに



ワンダフルワールド50年にふさわしい幕開け。貴重な映像はNYサッチモハウスのディレクターで、超レア映像を発掘し続けているリッキー・リカーディ氏にご提供いただいた。

「サッチモは、演奏で、歌で、トランペットで



自分の考えていることを相手に伝えているんです」と、これまた恵子さんの的を射たコメントで2本目の映像が始まる。

(2)エンターテインメント作戦

1967年12月20日、米テキサス州のフォート・ブッド陸軍基地での野外コンサートの記録。から放映された。ベトナム戦争の真った

だ中でのことで、戦地に向かう兵士たちが会場をびっしりと埋める。戦死した兵士たちも少なくなかったはずだ。そんな戦士たちの表情とサッチモの音楽が胸を打つ…と外山さん。

司会のキャベットのコメントがなんとも素晴らしい。「今日は若者バンドを紹介します。残念ながらあまり経験はありません。たった50

年。あまり有名でもなくて、世界で数億人に知られているだけです」と。サッチモのテーマソング「南部の夕暮れ」に始まり、「この素晴らしき世界」、「ハロー・ドーリー！」と続く。

ここで前回に次いで佐藤修さん(レコード協会会長など要職を歴任、現日本ジャズ音楽協会理事長)がステージに上がり、JassからJazzへの変遷を解説(13面に詳報)。

(3) フランク・シナトラ・ショー

映像に移り、1952年元旦のCBSテレビフランク・シナトラ・ショーのサッチモ、まるでシナトラが小物に見えてしまうほどリラックスした自然体で出演している。

(4) アイ・ゲット・アイディアズ

続いて1959年2月15日、独シュットガルトのテレビ放送からの映像。サッチモはジャズばかりでなくハワイアンからシャンソン、タンゴなどあらゆるジャンルの曲を素晴らしい“サッチモ・ナンバー”にしている。

この曲は、もともとアルゼンチン・タンゴ「アディオス・ムチャーチャス(さらば友よ)」。恵子さ



んが「絶対に入れて！」と推薦された曲という。

(5) ムーン・リバー

次いでサッチモがなくなる前年、1970年2月11日、先の人気キャスター、デイビッド・フロスト・ショーからサッチモの歌心がもろに伝わってくる、映画「ティファニーで朝食を」のテーマソング「ムーン・リバー」を歌うシーン。



ここでジャズ喫茶「いーぐる」店主でジャズ評論家の後藤雅洋さん(写真左)が前に。後藤さんは以前、外山さん

とあったとき、「サッチモは最高ですねえ」とズバリ。この日は古いジャズ、新しいジャズを語っていく中で、「最近のジャズには必ず

といっていいほどボーカルが入っていることが多い。ルイがやっていたのと同じ。いずれもルイ・アームストロングが昔引いた路線なんです」と、サッチモ

の変わらぬジャズの道筋を解き明かしてくれた。



(6)若き日のサッチモ

サッチモのスターへの出発点ともなった1932年、若き日のルイ・アームストロングの映画初出演となった漫画映画「ベティーの蛮地探検」(マックス・フラッシャー)の映像。「お前がおっ死んだら嬉しいぜ、このバカ野郎(I'll be Glad When You're Dead, You Rascal You)」というサッチモのヒット曲をテーマに、アフリカ探検のベティーちゃんを追いかける、アニメと実写の巨大なサッチモの



顔が登場する(写真、前頁の右下)。音は全編当時のサッチモの楽団。

また、同年の映像で実写の「黒とブルーの幻想(Rhapsody in Black & Blue)」から1本。黒人を笑いの種にしたコメディで、サッチモはいわゆる“アフリカの土人”扱いで登場している(写真同)。でも、そんなシチュエーションでも、目いっぱい楽しみ目の覚めるような、モダンジャズの若手プレイヤーを思わせる斬新なプレイを炸裂させているサッチモ、そこにはすでに「ハロー・ドーリー！」で世界の人気者になった“スター”の存在を見ることができる。

ここで外山夫妻がトランペットとバンジョーによる「I'll be Glad When You're Dead, You Rascal You」と豹の皮を着てサッチモが演奏していた、「シャイン」を実演してみせる。

(7)初のハリウッド映画出演

休憩前、最後の1シーンは、1936年の「ペニー・フロン・ヘブン(邦題:黄金の雨)から「スケルトン・イン・ザ・クローゼット(戸棚に骸骨)」」。ビング・クロスビーと共演したサッチモ初めてのハリウッド映画出演。クロスビーがサッチモたちとお化け屋敷のような空き家をショー・レストランにしてオープン。サッチモの演奏に骸骨も踊りだす(写真左)。テーブルや壁からお化けが飛び出したりしてレストランのお客さんを驚かせたりする。バンドはジミー・ドーシー楽団、ライオネル・ハンプトン(vib)が素敵なドラム演奏を披露している。

白黒テレビ時代のタイムックス・オールスター・ジャズショー

15分間のインターミッションのあとは、「白黒テレビ時代のタイムックス・オールスター・ジャズショー」(1957～1959)から2本。テレビ放送開始とともにジャズはテレビ放送の好素材だった。この時計メーカー、タイムックス提供のオールスター・ジャズショーは、ブロードウェイのCBSスタジオ50(別名:エド・サリバン劇場)の人気番組として多くのジャズメンの姿をとらえてきた。



そんな時代にアメリカにいらしたゲストの瀬川昌久さん(写真上)が前に。「外山さんのトランペットは神がかっていますねえ」と讃えた後、サッチモがこのワンダフルワールドを歌う時に若者から「なんでこの世界が素晴らしい

の？」と尋ねられたエピソードを披露。(これについては後ほどじっくり)

また、サッチモの歌う「ブルーベリー・ヒル」の素晴らしさにも…。そうそう、そういえば、この日会場に日本ブルーベリー協会顧問、堀井敬一さんがお見えになっていた。「ブルーベリー・ヒル」を日本中に広めていった“功労者”の一人でもある。

(8) ロッキン・チェアー

オールスター・ジャズショー、最初の曲は、サッチモとトロンボーン奏者、ジャック・ティーガーデンが掛け合



いで歌った「ロッキン・チェアー」(1957年12月30日)。足腰が弱って揺り椅子の世話になっている老人と息子が漫才調の掛け合いで歌う、しみじみと心にしみる演奏。外山さんもニューオリンズで現地のトロンボーン奏者とユーモアたっぷりに掛け合ったこともしばしばありましたね。

(9) セントルイス・ブルース

続いて「セントルイス・ブルース」(1958年4月30日)。タイムックス・オールスター・ジャズ



ズショーにはジャズスターたちが多数集まって最後は大ジャムセッションで終わるのが恒例だった。この日もサッチモが案内役でジョージ・

シアリング(p)、ライオネル・ハンプトン(vib)楽



団、ジェリー・マリガン(bs)、ジャック・ティーガーデン(tb)、ジェイPモーガン(vo)、コーギー・コール(ds)、ジーン・クルーパー(ds)らが「セントルイス・ブルース」を盛り上げる。

「ジャズマンはみんな兄弟で、世界は一つ。そんな感じがします」と外山さん。

(10) ジャズ大使、サッチモ

さあ、ジャズ大使サッチモの出番。「サッチモは世界を廻る」(1956年)から「ベイズン・ストリート・ブルース」、オール・フォー・ユー・レイ」、「ロイヤル・ガーデン・ブルース」、「ブラック&ブルー」…次々と続きます。「サッチ

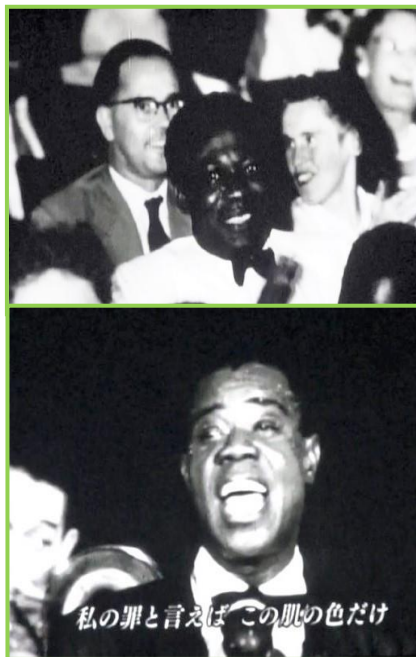


モは本当に共産圏でも、世界のどこに行っても大歓迎を受けているんですね。それでアメリカ政府はサッチモにジャズ

大使としての役目を依頼したのです」と恵子さん。

この“サッチモ大使の旅”の様子はCBSテレビの番組になり、「サッチモ・ザ・グレート(邦題:サッチモは世界を廻る)」として劇場放映もされた。

中でも圧巻は独立前夜のガーナを訪れたサッチモは当時のエンクルマ首相(のちに大統領)の前で黒人たちの悲哀「ブラック&ブルー



(どうしてこんなに黒くてブルーなんだ)」を捧げる。ハーバード大留学の学生時代からジャズファンというエンクルマ首相は目を輝かせ、感動の表情で聞き入る姿がクローズアップされる。「サッチモは自分の思っていることをここでもジャズに託して伝えているんです」と恵子さん。

(11)鉄のカーテンの向こう側での大歓迎

鉄のカーテンの向こうで大歓迎の場面も。1965年3月22日、東ベルリン。西ドイツのベルリンでは何度も演奏しているサッチモですが、これは初めての東ベルリン。熱狂した観衆の拍手がやまない。何度もカーテンコール。まだ鳴りやまない拍手にサッチモは、ステージ衣装を解いてボウタイをぶら下げてカーテンの隙間から挨拶。まだ拍手が止まらない。今度はもうガウンを着た姿で現れ挨拶す

る。楽屋でもうくつろいでいたのでしょう。

東ドイツでは、サッチモもジャズも、いっさいレコードがなかった。それにもかかわらずこれほどの人気があったのです。ベルリンの壁をこっそりぐって西側のジャズを聴きに來ていた人が多かったのだといいます。

(12)ボーイ・フロム・ ニューオリンズ

そして、これこそこの日のハイライトの一つだったに違いない。サッチモがなくなる5ヵ月前、1971年2月10日、サッチモはデイビッド・フロスト・ショーに出演し、まるで人生の終わりに近づいたことを感じたように自らの人生を振り返った歌を披露する。聖者の行進のメロディーに乗せて歌う、まさに遺言のような映像。この歌を恵子さんが聞き取り翻訳した。この日は恵子さんがこの朗読までやって見せてくれた。全文を披露させていただきます。

ボーイ・フロム・ニューオリンズ ～サッチモの一生の物語～

私が生まれたのはその昔、1900年7月4日
それは裏街のジェーンズ横丁
ニューオリンズ生まれの一人の少年のお話

5歳くらいのころだったか、、、。
私が偉大なジャズ王キング・オリバーが
ニューオリンズ・ジャズを演るのを聞いたのは
それは、私がよく通ったランパート通りでだった。

今になってわかるんだ。
なぜ私がこのラッパでジャズを吹くために生まれてきたかが。
それは故郷の人々に、ニューオリンズ生まれのルイを

誇りに思っただけのことだ。

私は、大きくなってバンドに入った

そして国中いたるところで、美しい音色で演奏したのさ。

ビール・ストリートからセントルイスまで、
ニューオリンズのジャズを吹いて。

決して忘れることのできない思い出
それは、街中の安酒場やキャバレーでブルースを演奏した思い出。
そしてニューオリンズのジャズは、どう演奏しようとする自由がいっぱいだったのさ。

ハリウッドでは、友達ビング(クロスビー)やミセス・グレース(ケリー)と肩を並べたんだ。
そうさ、皆さんの‘サッチモ爺さん’は絶好調だった
ニューオリンズ出の大スターさ！

そしてヨーロッパからもお呼びがきて、出かけたんだ。
色々な大陸をまたにかけて、ジャズを吹いてだから私は“ジャズ大使”と呼ばれるようになったんだ。
ニューオリンズのジャズをスウィングしてね。

そう、最後に皆さん、……

私のはるばる来た道は、
ほんとうにすばらしく、楽しいことばかりだった。
神さま、心から感謝します。そして、皆さん、
本当にありがとう。
皆さんは、この“サッチモ爺さん”にとても親切でした。
この年をとった、ニューオリンズ生まれの
‘グッド・ルッキングな少年’にね！
(外山恵子訳)

そして登場したサッチモの ワンダフルワールド傑作映像

この後サッチモのちょっと変わった映像が映し出された。サッチモが歌うワンダフルワールドに合わせて、手の指を影絵で動かしていく。我々が指で狐を作るみたいに。これが何とサッチモの顔そっくりに歌いだす。オーストラリア出身のエンターテイナー、レイモンド・クロウの傑作影絵ショー。残念ながらサッチモ自身はこの影絵を見ていないそうだ。



＜サッチモから世界へのメッセージ＞

そして、ワンダフルワールド録音から50年の記念映像会の最終を飾ったのは、日本レイ・アームストロング協会特別編集のサッチモから世界へのメッセージ

サッチモは1967年一番有名で耳にするワンダフルワールドとは別に、70歳の誕生日の記念録音とも言える「ワット・ア・ワンダフル・ワールド」のテイクを残している。この1970年5月26日吹き込みのゴスペル調のテイクは、“遺言”性が強く、冒頭の荘厳なハーモニーをバックに語られるサッチモの語りかけは、旧約聖書に登場するモーゼか何か予言者の様な姿を感じてしまう。その内容は50年近く経った現代の世界にあまりにもピッタリで、時代を超えて私達に訴えかけてくる…。サッチモはこの演奏の前にこんなことを言っているのだ。

若い連中に、時々こんな事を言われるんだ
“ねえ親爺さん、何処が‘ワンダフルなワールド’なんだい？

世界中に戦争が溢れ、人々は飢え、地球は汚されている…

とても、ワンダフルとは思えないよ！”ってね
でもね、こうは思えないかい

世界が悪いのではなく、私達が世界にしていることが悪いんだと

そして、皆があきらめなくて努力さえすれば、
世界はもっともっとワンダフルなワールドになる
って…

一番の秘訣は、ラブ、ベイビー、ラブ…愛

さ！！

もし、我々がもっともっと、お互いを愛し合いさえすれば、多くの問題が解決する！！
そうになったら、世界はそれこそ最高…だから、この親爺はいつも、こう歌ってるのさ…
この目に映る全てのモノが美しい、なんて素晴らしい世界なんだろう

この会を締めくくった映像は、テレビディレクターで日本ルイ・アームストロング協会会員の柿崎拓哉さんと、テレビディレクター小高隆幸さんが、故佐藤有三さんのサッチモの写真や、ニューオリンズの子供たちへの楽器プレゼント写真をサッチモの録音に組み込んでくださった特別編集版。大いに感激された瀬川先生が、灌漑深くこう述べてられていた。『この映像は安部首相にお願いしてトランプ大統領に届けて見てもらうべきです！サッチモは偉大ですね、こんなことも考えていたんですね』。

この会で上映した超レアなサッチモの映像は、NYルイ・アームストロング・ハウス博物館の研究員で、What a Wonderful World: The Magic of Louis Armstrong's Later Years の著者、リッキー・リカーディ氏から提供されたものだった。

WHAT A WONDERFUL WORLD

この素晴らしい世界

(作詞・作曲: George David Weiss - G. Douglass)

I see trees of green, red roses too
I see them bloom for me and you
And I think to myself, what a wonderful world
I see skies of blue and clouds of white
The bright blessed day, the dark sacred night
And I think to myself, what a wonderful world
The colors of the rainbow, so pretty in the sky
Are also on the faces of people going by
I see friends shaking hands,
saying how do you do
They're really saying, I love you
I hear babies cry, I watch them grow
They'll learn much more than I'll ever know
And I think to myself, what a wonderful world
Yes, I think to myself, what a wonderful world

木々の緑、赤い薔薇も
私と君たちのために咲いている
ほんとうに…What A Wonderful World !
青い空、そして白い雲
明るい素敵な日 暗く神聖な夜も
私は思うんです 何と素敵な世界なんだ
虹の色は空に映え 道行く人の顔に映り
皆の握手と How Do You Do? は
心からの I Love You
赤ん坊の泣き声 育っていく彼ら
皆私たちより多くのことを学ぶのです
私は思うんです
なんて素晴らしい世界なんだ…と
ほんとうに What A Wonderful World !

外山喜雄・恵子のラップとバンジョー片手の特別シリーズ例会(第3回)

豪華な特別ゲストを迎えて「サッチモのジャズ事始め」

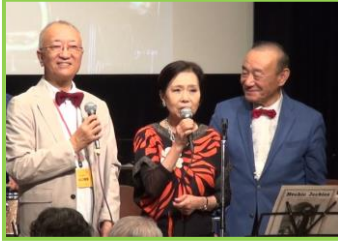
9月30日、御茶ノ水のアテネ・フランセ文化センター4階ホールで開催

3ヵ月にわたって開催されてきたジャズレコード100年記念、外山喜雄・恵子のラップとバンジョー片手のWJF特別シリーズ例会(第3回、通算63回例会)「サッチモのジャズ事始め」が9月30日、御茶ノ水のアテネ・フランセ文化センター4階ホールで開催された。サッチモの初録音からエラ&ルイ、ルイ&デューク・エリントン、プレイズ・ディズニー、ハロー・ドーリー、この素晴らしい世界…まで、サッチモの軌跡とジャズレコード100年への貢献をたっぷり再現、会場を埋めた満員のお客様ととも歴史を辿っていった。

(小泉良夫)

午後5時半、山口さんの司会で開演 セインツの「オチチョニア(黒い瞳)」

午後5時半、
山口義憲さん
(WJF会報「ワ
ンダフルワ
ールド通信」編
集長)の司会



で外山夫妻がステージに上って例会はスタート。この日お客様として招かれていた故サー・チャールス・トンプソン氏の牧子夫人、ジャズ評論家、故いッノでルヲ氏の磯野博子夫人らが紹介された後、世界中を熱狂させたサッチモの軌跡をたどった演奏の幕を開ける。

まずは、サッチモも出演した映画『グレン・ミラー物語』に使われる予定だったというロシア民謡「オチチョニア(黒い瞳)」。演奏は外山喜雄とデキシシーセインツ、外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)、広津誠(cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、木村“おうじ”純士(ds)の皆さん。次いでディズニー映画『南部の歌』の主題歌「ジッパ・ディー・ドゥー・ダー」。そして1961年に録音された、デューク・エリントンとルイの共演アルバムから「ブラック&タン・ファンタジー(黒と褐色の幻想曲)」。エリントンはサッチモをはじめニューオリンズのジャズの先駆者たちに大きな影響を受けてバンドを結成、独特のジャズとエリントン・サウンドを創り出している。サッチモが世界に教えたスイングである。

特別ゲスト NY 在住の霧生ナブ子さん ピアノはモダンジャズの太田寛二さん

さあ、いよいよ特別ゲストの登場。2003年、NYのルイ・アームストロング・ハウス博物館がオープンした時、ゲストシンガーとして招かれていた NY 在住の霧生ナブ子さん(昨年、日

本ジャズボーカル大賞を受賞)。外山さんとはその時以来のお付き合い。ピアノはお父様でモダンジャズの名手、太田寛二さん。恵子さんはバンジョーに回る。

サッチモは、ベッシー・スミス、ビリー・ホリデー、エラ・フィッツジェラルド、ら多くの女性歌手と共演している。霧生さんがそれらを熱唱する。最初の曲は、サッチモが主役で登場し、名歌手ビリー・ホリデーと共演した1947年の映画『ニューオリンズ』の主題歌「Do you know what it means to miss New Orleans(懐かしのニューオリンズ)」。

当時ニューオリンズ・リバイバルとかデキシシーランド・リバイバルと呼ばれる大流行が起こった。サッチモはその先駆者でもあった。

エラ、ベッシー…ナブ子さんが熱唱 ピアニストのお母様も来ていらした

霧生さんが次々と歌い続け聴衆をしつかり魅了していく。チャールストン・ブームに乗り大ヒットした女性歌手エバ・テイラーの「エブリバディー・ラブス・マイ・ベイビー」(1924年)、ブルースの女帝ベッシー・スミスの「セントルイス・ブルース」(1925年)、サッチモと初そして唯一の共演となった歴史的録音に霧生さんが挑んでいく。なんとといってもエラ・フィッツジェラルドとの共演『エラ&ルイ』(昨年は録



音から60年)からスローなバラード

「ザ・ニアネス・オブ・ユー」。外山さんのミートプレイも素晴らしく、歌い終わった霧生さんが

しっかり外山さんとハグするシーンも。

あつ、霧生さんのお母様、クラシックのピアニスト、霧生トシ子さんも来ていらしたんですね。ステージに呼び出され、12月18日のサントリーホールでの「第九」公演などPR。フィナーレの「聖者の行進」では、飛び入りでピアノについて楽しそうに演奏されていた。

で、お父様の太田さん(写真下)、小学校4年生のときからサッチモのあこがれていたというエピソードを紹介した後、粉川さんのトロンボーンもフィーチャーしての「ディア・オールド・サウスランド(懐かしの南部)」。

次いでニューオリンズ時代のデキシー編成のオールスターズを編成してジャズに新しい時代の到来を告げた1947年のボストン・シンホニーホール・コンサートから「ロイヤル・ガーデン・ブルース」。

サッチモ・シリーズのCD10枚発売 55枚! たった3枚残して全完売!

ここで今月、ユニバーサル・ミュージックから発売された10枚のサッチモ・シリーズについて元同社部長として数々のサッチモのCDを実現した青野浩史さんからこのシリーズについての解説があった。この日、ホールの入り口で発売されたこの新シリーズは大人気で、なんと青野さんが販売した55枚のうち3枚を残して全完売。「あ、これ全部ください!」という女性。「あれ!? もうなくなっちゃったんですか? そうですか、ではレコード店で…」という男性。私も2枚買



っておいてよかったなあ。

外山さんに日本ジャズ音楽協会から 「ジャズ大賞」と金一封のご祝儀まで

ここで嬉しいお知らせ。外山さんが日本ジャズ音楽協会から「ジャズ大賞」を受賞されたというお知らせ。会長の石井一さん(国土庁長官、自治大臣など要職を歴



任)から表彰状と石井さんと事務局長、佐藤修さんからの金一封を受け取る外山さんのまなこはウルウル…。これには奥様、恵子さんの大変な協力…という一心同体の人生があったことを石井さんは強調されていた(次号で詳報)。(ここで15分の休憩)

佐藤修さんが「ジャズ事始め」トーク 黒人とニューオリンズ2つが必要条件

第2部のスタートを前に佐藤修さんから「ジャズ事始め」のトーク。佐藤さんのトークは、毎回なかなかユニークで聴衆を楽しませてくれる。まずはこんなお話も…。

ステージ背後のスクリーンに映し出されたサッチモ1953年の来日の際の「ルイ・アームストロングとオールスターズ日本公演」という劇場の大きな看板。そのわきに小さくその年の「クリスマスパレード」の広告も掲げられていて、笠置シズ子、東海林太郎…の名前が見えるというお話を枕に「ジャズ事始め」はスタート。

＜JAZZ は黒人により発生した黒人の音楽といわれます。でも、アフリカからの黒人奴隷はニューオリンズ以外にもアメリカ全土に売られました。であればアメリカのあっちこっちから JAZZ が発生してなくてはなりません。現にバスター・ベ



イリー(cl,sax)は1902年、メンフィスで生まれています。しかし、これは JAZZ に似ていても譜面通りに演奏する、インプロビゼーションのない形だったようです。彼は1917年ニューオリンズに行って JAZZ の影響を強く受け、のちにシカゴにいて JAZZ のプレイヤーと演奏できました。つまりバスター・ベイリーがメン

フィスで演奏していたのは似ていても JAZZ ではなかったのです。つまり、黒人とニューオリンズの2つの要素が必要条件だったのです。

1800年代後半、ニューオリンズの人種はフランス、イギリス、スペイン、クリオールがいて音楽も西インド諸島、イギリス、アイルランド、スコットランド、ドイツ、アフリカ、スペイン、メキシコ、フランスと様々な音楽が街じゅうで演奏されていました。ニューオリンズでは、黒人の男が死ぬとブラス・バンドが雇われ、墓場への葬列の先頭にたち、行進しますが、これは南フランスに残っていた風習だそうです。

黒人だけの音楽だと複合リズムが発展するが、メロディーが乏しいものになっただろうという説があります。「Flee As A Bird」(スペイン民謡 追憶)、「Oh Didn't He Ranble」(アイルランド民謡 ダービーシェア・ラム)、「Just A Cioser Walk With Thee」(賛美歌のように聞こえるが、スウェーデンの糸紡ぎ歌 < spin spin> 日本名はく虚しく老いぬ>)

メロディーは各国のワルツ、マズルカ、ポルカ、カリプソ 等を取り入れた。社会の階層的には、フランスの支配期間が長かったため、他の地域にはないクリオールが一般黒人とは違った階級を形成した。これが大きかった。

同じ南部でもアングロ・サクソンが支配する街では別の文化だった。マーク・トウエインの「ハックルベリーフィン」に出てくる黒人ジムは当時の白人に好かれる『いいニグロ』の代表。ジムは、半分は道化、半分は愛玩用の家畜の様に書かれ、人間として扱われていない。20～30年代シカゴ、ニューヨークで活躍したジャズの巨人たちは、この雰囲気を感じ取り道化役者になり切った。アームストロング、F・ワーラーも例外ではない>

お墓への悲しい行進で第2部を開始 スイングを生んだ美しいジャズ葬式

この佐藤さんのトークにもあったお墓への悲しい行進、スペイン民謡「フリー・アズ・ア・バード(追憶)」が第2部の最初の曲となった。サッチモも少年時代、このジャズ葬式が「事始め」となり、ジャズを覚えたといいます。お墓からの帰りの曲で有名になったのが、あの「聖者の行進」。天に召されて苦しみから解放される。踊って帰ろう！ そんな黒人たちの気持ちからジャズのスイングが生まれたのです。

サッチモはインタビューでこう言っています。

「美しい音楽といえば、一度ニューオリンズの葬式を見てほしいもんだ。ジャズ葬式で演奏するオンワード・ブラスバンド…。まるでオペラの歌手が心をこめて歌うように、悲しさや美しさを、心から音にこめるのさ。評論家が私のミュージックのスタイルは何スタイルか、なんて議論をしているけれど、私はいつも、ニューオリンズのスタイルをやっているのさ。トランペットを吹くとき、歌を歌うとき、目をつぶるとニューオリンズの風景や私の師匠のジョー・キング・オリバーのラップのフレーズが浮かんでくる…。私は、それをやってるだけなんだ」。

恵子さんはピアノに戻ってセインツの演奏。



「フリー・アズ・ア・バード(追憶)」。

2曲目は、佐藤さんが最も好きな曲で、すべてのバージョンを収集されているという「セント・ジェームズ病院」。1928年の演奏をもとにサックスの後藤裕二さん、渡邊恭一さんがセインツに加わる。広津さんはクラとサックスの二刀流。サックス陣がそれぞれフィーチャーされ、大迫力の演奏となる。3曲目はハワイアンの名曲「ソング・オブ・ジ・アイランド(島の歌)」。サッチモのジャズ感覚は、いろいろな音楽に影響を及ぼしていく。そんな好例。ここで鈴木孝二さん(c)が加わり熱演。広津さんの編曲だそうで、素晴らしい演奏となる。

次いでサッチモのジャズ語の原点、スキヤットの事始めとなった「ヒービー・ジービーズ」。歌詞の書かれた楽譜を手にとり歌いだすサッチモ。その譜面を落としてしまい窮余の一策、スキヤットが飛び出したのだ。このシーンを外山さんが再現して見せ、会場の笑いを誘う。

若き日のサッチモの名演として知られ、当時の著明的なアドリブとしてその後のジャズに大きな影響を与えた「タイト・ライク・ジス」でこの1920年代のコーナーを締めくくった。

映画スターとしてもサッチモは大活躍。その最たる映画、アカデミー音楽賞の(続)

ニューオリンズにジャズの伝説を訪ねて② 『ジャズ誕生時代の“化石”』があちこちに

伝説の男、初代ジャズ王バディー・ボールデン

昔読んだジャズの歴史の本に出てきた初代ジャズ王バ



ディー・ボールデン(1877～1931)の話。あの南部の小さな田舎街に生まれたジャズが、世界中にあつという間に広がった。ジャズを生んだ街はどんな街なんだろう。ニューオリンズに武者修行に行ったのは、そんなジャズ誕生当時の神話のようなお話への大きな憧れがあった。ニューオ

リンズ滞在中に見つけた大昔の新聞や広告には、神話の時代のバンドが登場した。ボールデンが演奏したと伝えられる公園の催しのピラや1900年当時の譜面もあった。ジャズ起ころは1900年頃アメリカ中で流行したラグタイムを、ニューオリンズの黒人コルネット奏者、バディー・ボールデンが、アフリカ的感覚でスウィングさせた時だ。

＜バディー・ボールデンの伝説＞

曰く ミシシッピーの向こう岸まで音が聞こえた？

曰く ボールデンの人気は大変なもの。コール・アワ・チレン・ホーム(子供たちを呼び戻そう)と言って吹き出すと観客が皆こちらに来てしまった？

曰く ボールデンは床屋さんで、クリケットと言う新聞も出していた？

譜面が読めず、隣の公演で演奏するラグタイムバンドの曲を聞き覚えで、強烈なリズムと共に演奏したところからジャズのアドリブと独特のスウィング感が生まれたといわれる。

ここに、神話と言おうか、私達が実際に出会ったジャズ石器時代の化石のようなもろもろを、ご紹介しよう。

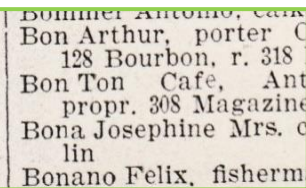
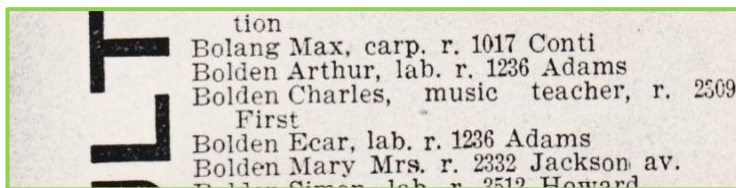
電話帳に代わって販売された「ソーズの住所録」

電話が無かった時代、電話帳のような役割をした住所録が販売されていた。ニューオリンズ図書館で見つけた1901年のソーズの住所録には、伝説のバディー・ボールデンの住所もあった。Charles Bolden 住所は2309 First Street 仕事はMusic Teacher とある。最初のジャズレコー



2309ファースト・ストリート、ボールデンの家(ツアー客の背面)は現存している＝2000年のジャズツアーで

ドを出した白人バンド ODBJ のクラリネット奏者ラリー・シールズはボールデンと同じブロックに住んでいたことから、ボールデンのジャズに影響を受けたことがわかる。キング・オリバーも、キッド・オリーもルイ・アームストロングもジェリー・ロール・モートンも…みんなソーズに住所が載っている！



1901年ソーズの住所録。
Bolden Charles とあるのがバディー・ボールデンの住所

(前頁からの続き) 候補にもなった『上流社会』から「ハインサイティー・カリプソ」。会場の皆さんも合唱に加わって大いに盛り上がる。次にサッチモの永遠のヒット曲「この素晴らしい世界」と「ハロー・ドーリー！」に霧生さんも加わってとやまさんと熱唱、フィナーレとつないでいく。

フィナーレはもちろん「聖者の行進」 バンドが大喝采に沸く会場を廻る

フィナーレはもちろん永遠の世界的ヒット「聖者の行進」。もともとはバプテスト教会の讃美歌だったそう。初めてこの曲が録音されたのは1938年。そのサッチモのビッグ・バンドが再現される。霧生さん、外山さんの熱唱。バンドが大喝采の会場を廻る。最高の盛り上がりを見せた3回



特別シリーズ例会最終回。外山さんが振り返る。「お客様にも、出演者の皆様にも本当に喜んでいただき、素晴らしいシリーズ例会となりました」。

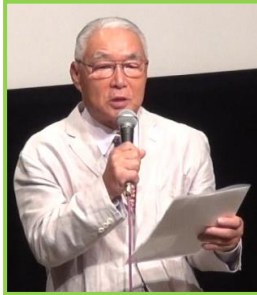
佐藤修さんのお話(3面)から… 絶大な認知を経て Jass～Jazz へ

比較的初期にシカゴに進出した白人バンド、トム・ブラウンのディキシランド・バンドは、1915年シカゴのラム・カフェで演奏した。シカゴ・ミュージシャン・ユニオンには加入しなかった。ユニオンの役員達はシカゴで演奏させないためにブラウンのバンドを Jazz Band と呼び、彼らの演奏する音楽を Jazz といった。その頃 Jazz という言葉は淫売屋で女達が使う最も卑猥な隠語であったから「トム・ブラウンの音楽は淫売屋の音楽だ」と言う事で彼等のグルーブを抹殺出来ると考えていた。ところが逆に Jazz という言葉が絶大な人気を得た。ラム・カフェの経営者はこの事件を利用してトム・ブラウンのバンドをディキシランド・ジャズ・バンドと名づけ宣伝した。

1916年、後の O・D・J・B はミラーのカフェに出た時は Stein's Band from Dixie と呼ばれていた。そんな折、客の中にいたボードビリアンが酒に酔い Jass It Up と声援。Jass とはシカゴの暗黒街の猥褻な意味を持つ俗語。こいつはうまい言葉だと直感した彼らは Band 名を Stein's Dixie Jass Band と改名した。ここで謎なのがなぜそもそも Jass にしろ、Jazz にしろ、その言葉本来の意味がなんなのかどこにも書いてありません。なぜ下品な言葉なのに人気を得たのか？ 新しい時代の到来とともに、人々の価値観も変化、タブー視されていたものが人々の望むものになっていき、新しい文化が生まれたともいえる。

プロデューサー、ボブ・シールの仕事

ワンダフルワールドの誕生とヒットは、サッチモのアイデアではありません。そこにはプロデューサーの存在があります。



What A Wonderful World はプロデューサー、Bob Thiele の Produce によって誕生しました。ボブ・シールがいなければ W・A・W・W は存在しませんでした。では、このプロデューサーは、

どのような役割を果たしたのでしょうか？ 次のような役割です。

1.企画立案～例えばミルト・ゲイブラーのようにポツンソングを歌わせるというような企画立案。例えば「シンフォニー・ホール」の録音をどうするのか？ 2枚組として発売する

という企画。そのためにどの楽曲をいれて何を落とすか？ 曲順はどうする

2.そのためのアーティストとの折衝 ジャケット、ライナーノーツはどうする？ 3.録音の準備 ミキサーを始めとする技術者の選定、手配 4.アートワークの手配 5.バジェット管理

What A Wonderful World 誕生させた この素晴らしき人たち

ボブ・シール以前にも、何人ものプロデューサーがサッチモのヒットに貢献しています。

<ジョージ・アバキャン>は、COLUMBIA レコード時代の20歳代の時、ホット5、7のリイシュエの編集に携わり、名盤「プレイズ・W・ハンデイー」や、「プレイズ・ファッツ・ワーラー」なども手掛けている。

<ミルト・ゲイブラー>は、DECCA 時代「シンフォニー・ホール」等の名作を送り出すと共に「ラビアン・ローズ」「ブルーベリー・ヒル」といったポップなナンバーをレイに演奏させファン層をひろげた。

<ボブ・シール> ABC 時代 WHAT A WONDERFUL WORLD を企画しアームストロングに PLAY させ、サッチモ最後の、そして、一番サッチモにふさわしい曲を生み出したのが<ボブ・シール>なのです。

**外山さん、小澤征爾さんと遭遇！
まさか？！の真夏の夜の夢
サイトウ・キネン・フェスティバルへ？**



**築地をドライブ中、路上でばったり
日比谷駅まで同乗、車でお見送り**

外山さんが築地方面をドライブ中、(何やらみすぼらしく感じた)一人の男性がタクシーを止めるような仕草で外山さんの車の前に飛び出してきた。慌ててブレーキを踏む外山さん。男性の顔をよく見ると、なんと、あの小澤征爾さんではないか！

この夏最高、35度を超えた酷暑日。「どこへ行かれるんですか？」と外山さん。いったんタクシーでないので戸惑った小澤さんだったが、外山さんのにこやかな顔を見て「いや、日比谷の地下鉄の駅まで行きたいのですよ」と。

**「俺もジャズは好きだよ」と小澤さん
バーンシュタインとのコラボ知ってる！**

それでは…と、征爾さんを車にお乗せした外山さん。世界の小澤さんとは面識がなかったが、ニューリンズ・ジャズ・ファンで、サッチモ祭にも毎年いらっしやっていた弟さんとの話をする「ああ、幹雄ね、あいつ、ジャズ好きだから…俺も好きだよ」。日本ルイ・アームストロング協会の話をする「サッチモ大好きだよ！」と小澤さん。

そんな話を進める中で、あのレナード・バーンシュタインとサッチモが「セントルイス・ブルース」でジョイントコンサートをした話にまで話題が膨らんでいった。すると小澤さん、興奮気味に「知ってる、知ってる、あの映画大好き！」。

**外山さんのPRに小澤さんはすかさず
キネン・フェスティバルにぴったりだ！**

すかさず外山さんが「この映像に日本語字幕を付けて持っている」というと、「僕が松本

でやっているサイトウ・キネン・フェスティバル」にぴったりだな」と小澤さん！

まあ、話はこれぐらいで日比谷駅に到着し、終わってしまったが、これはなんともすごい提案。ひよっとして小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラと外山喜雄&デキシーセイツイの

バーンシュタインとサッチモ・コラボのような素晴らしいコンサートが実現したりして…。

なに！？ 真夏の夜の夢ですって？

(写真はインターネットから)



「私の1枚」

小泉良夫

外山恵子 Banjo & Piano First Leader
Album KEIKO'S NEW ORLEANS SPIRIT

『世界は日の出を待っている』

銀座の「ジャズひな祭り」などで私が大ファンの恵子さん初のリーダー・アルバム。もちろん、ここでも外山喜雄とデキシシーセイイツが加わり全面バックアップしている。私はこの録音スタジオにちょっぴりお邪魔させていただいたが、モニターを聴くみなさんのいつになく緊張と真剣さに心を打たれた。

全15曲。中でも「バイバイ・ブルース」がとても印象に残っていた。「そう、この曲をアルバムのタイトルにしたかったんですが、初めからバイバイ…ではねえ」と外山さん。それで恵子さんの代表的なバンジョー曲の「世界は日の出を待っている」がタイトルになったようだ。私が最も好きな恵子さんのバンジョー「ワシントン広場の夜はふけて」も入っているし、「リード・ミー・セイビアー」、「テネシーワルツ」、「ス

ワニー河」…聞きなれた素晴らしい曲もたっぷりと聴かせてくれる。

さらに私がジャズの曲で一番好きな「セントジェームス病院」もあるし、これに次いで好きな「チャイナタウン・マイ・チャイナタウン」、「ハイ・ソサイティー・カリプソ」…ついつい目を潤ませてしまう「誰も知らない私の悩み」も入っているから嬉しい。

我が家のJBLスピーカーをフル稼働させて聴いた「ピーター・パンサー・パター」の何とも軽快な恵子さんのピアノタッチと藤崎羊一さんの豪快で迫力の低音を効かせたベース、サバオ渡辺さんのブラシの一体感は、何度聴いて

も圧倒される。恵子さんのピアノソロ「ケイコズ・ブギー」も圧巻…と、すべての感想を書くスペースがないが、これを聴けばどなたも恵子ファンになってしまうに違いない。

そうそう、ジャケット写真など(あまり自慢もできないが)、私が撮った写真もあれこれ使っていること、私の「1枚」として掲げた所以でもあるんですが…。



「私の1枚」—原稿を募集します

前号の会報95号でご紹介させていただいた中村宏さん(防衛医大名誉教授、ジャズ評論家)が「日本医事新報」にお書きになった「私の1曲～サッチモの珠玉の名盤」に、大いに刺激を受けた外山さんから私に「これから皆さんにも「私の1枚」として書いていただきましょうよ」とのご提案。私も大賛成だったが、「その第1番は、ぜひ小泉さんをお願いします」との“強要”。何度もお断りしたんです

がねえ。

そこで思い立ったのが、私がその“見本”みたいなものを書いて、会員の皆さんからも「私の1枚」を寄せていただくというアイデア。いかがですか？ ぜひご応募ください。

原稿用紙に2枚程度(800字)でジャケット写真もつけてご応募ください。

メール(saints@js9.so-net.ne.jp)、あるいは〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15、外山喜雄、FAX 047-355-1004 などでお送りください。

SPレコード盤の復刻録音で聴く
“ジャズ 夏のはなしです”

～宮沢賢治が会った洋楽はやはり歌・ジャズ

ジャズ人形の売上金など、WJFに多大な寄付金をお寄せ…いただいたり、仙台でのジャズイベントなどでも、WJFに全面的なご協力をしていただいている仙台市のジャズカフェ「JAZZ ME BLUES noLa」(022-398-6088)のオーナー、佐々木孝夫さんが、宮沢賢治とジャズにまつわる上記のタイトル**“ジャズ 夏のはなしです”**という素敵なCD(写真下)を作られた(企画・構成・音源提供:ささきたかお)。

＜宮沢賢治はクラシックに造詣が深かったことは知られていますが、実はクラシック以外にも、ジャズ、ポップスやタンゴなど幅広いジャンルの

音楽を聴いていた類をみない豊かな感性の持ち主です。「セロ弾きのゴーシュ」や「ポラーノの広場」など、賢治の童話や詩に登場する曲や、賢治が会った曲の元歌を当時のSPレコード盤で再現、その復刻録音で聴く貴重なアルバムです(ジャケットの惹句から)

宮沢賢治の時代にタイムスリップして一緒に聴いているような、とても不思議な時間を体験させてくれたCD。ちょっぴりご紹介させていただきました。みなさんもいかが？

恵子さんの「ピーター・パンサー・パター」
浅草 HUB で手前ミソながらのリクエスト

はなはだ手前ミソながら「私の1枚」に恵子さんのアルバムを取り上げた(15面)こともあって、デキシシーセイツイのライブが聴きたくなった。そんなこともあって9月13日、HUB

思います。(山)

ジャズレコード初吹き込み100年。この素晴らしき世界に録音50年、エラ・フイツジエラルド生誕100年等々とジャズの歴史のキリ番が続いた今年2017年。WJFの3回シリーズ例会の総仕上げ、第3回例会はサッチモ・ジャズ始め「をテーマに、サッチモのジャズ史における足跡を演奏とトークで振り返りました」▼佐藤修さんのトークはジャズがニューオリンズで誕生したのは必然だった▼霧生ナブ子さんと外山さんのエラ&ルイ、この素晴らしき世界のデユットに酔いしれ、太田寛二さんのピアノでフルトピーナッツ・ビバップ演奏は、サッチモのオールスターズのメンバー構成に思いを馳せるものでありました▼小針俊郎さんに、今回の例会コンサート構成を高く評価していただいたことも、ヨロコビでした。ユニバーサルミュージックからリリースされたサッチモの9タイトルとベストCDもタイミングよくコンサートで紹介され、売れ行きも好調でした▼12月17日のクリスマスパーティーで、ジャズ史的に素晴しかった2017年をみなさまと一緒に寿ぎたいと思います。(山)

浅草店のセイツイライブに出かけて行ったのです。

そこでさっそくリクエストしたのが、同アルバムでも、非常に印象に残っていた「ピーター・パンサー・パター」。恵子さんと藤崎羊一さん、それにこの日のドラム、木村“おうじ”純士さんによる演奏(写真)。他にも同アルバムに収録され



ている曲が多数取り上げられていて、ワインを傾けながら至福の時間を過ごさせていただいた。

手前ミソついでにご報告。(小泉良夫)

募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

一般会員(General Membership)	¥6,000
学生会員(Student Membership)	¥3,000
賛助会員(Friends of Louis Armstrong)	¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Google で

＜検索＞ルイ・アームストロング

<http://wjf4464.la.coocan.jp/>

編集長から

ジャズレコード初吹き込み100年。この素晴らしき世界に録音50年、エラ・フイツジエラルド生誕100年等々とジャズの歴史のキリ番が続いた今年2017年。WJFの3回シリーズ例会の総仕上げ、第3回例会はサッチモ・ジャズ始め「をテーマに、サッチモのジャズ史における足跡を演奏とトークで振り返りました」▼佐藤修さんのトークはジャズがニューオリンズで誕生したのは必然だった▼霧生ナブ子さんと外山さんのエラ&ルイ、この素晴らしき世界のデユットに酔いしれ、太田寛二さんのピアノでフルトピーナッツ・ビバップ演奏は、サッチモのオールスターズのメンバー構成に思いを馳せるものでありました▼小針俊郎さんに、今回の例会コンサート構成を高く評価していただいたことも、ヨロコビでした。ユニバーサルミュージックからリリースされたサッチモの9タイトルとベストCDもタイミングよくコンサートで紹介され、売れ行きも好調でした▼12月17日のクリスマスパーティーで、ジャズ史的に素晴しかった2017年をみなさまと一緒に寿ぎたいと思います。(山)